

風聴くや

三上程子句集

Mikami Teiko

「風聴くや」は、風が運んでくる過去や、未来の声を胸の内に確と聴きとめて、俳句人生を楽しく充実させてゆきたいとの思いを込めた句集名である。

恩師・安住敦。初学から作者の秀でた感性に期待し、指導に精魂込めた永作火童。敦、火童の声は風となって、終生作者の胸に励ましを送り続けるだろう。

ながさく清江

安住敦先生御逝去

もう会へぬ七月八日の知らせかな

てんと虫雨を背に受け喪に服す

この秋の一番の冷え母の背に

黄落やまた母に呼ぶ救急車

捨て切れぬ仕事に重ね着して母は

寒さうに数字の並ぶ帳簿かな

山茶花や会ひたき人の山ほどあり

有り余るしあわせのごと霜の花

忘年会手持ち無沙汰の手をたたく

鏡餅ひび割れ別の世が見ゆる

落人のごとく焚火に手をかざす

確かめに行くには寒しものの音

部屋中の寒さ集めて決断す

最賈目に見て中の下の海鼠かな

鬼打豆炒る母に父遠くをり

ひとつかみ豆撒いて父ねむりけり

出来もせぬことに手を出し山笑ふ

風船に息足して母痩せにけり

何もしてやれず草笛母に吹く

子鳥のころもとなき覚悟かな

休業の貼り紙梅雨を呼びにけり

母にも母ありて名をよぶ火取虫

いまはただ父母のこのみ髪洗ふ

なきがらを迎ふる梅雨の暈かな

鳥の子なぐさめられて鳴きにけり

待てば来る秋のごとくに母よもどれ

残されて父と娘で焚く門火

出せば出る力や秋の蠅歩む

侘助やとほき家族となりし母

切り盛りにまだ慣れぬ湯気立ててをり

コ
ー
ヒ
ー
と
パ
ン
を
仏
に
春
を
待
つ

好
き
な
絵
を
掛
け
て
北
窓
開
き
け
り

も
つ
と
も
い
い
顔
し
て
会
は
む
か
た
つ
む
り

水
に
放
つ
負
け
ん
気
強
き
茄
子
の
紺

香水や話変へねば喧嘩になる

盆用意割烹着で母還るかも

燕去ぬ何が起きてもふり向かず

山茶花の散る数うすれゆく情

け
し
か
ら
ん
は
父
の
口
癖
寒
に
入
る

人
日
の
こ
つ
こ
つ
朝
日
昇
り
け
り

南
無
大
師
空
か
ら
椿
落
ち
て
来
る

地
虫
出
て
す
ぐ
友
達
を
つ
く
り
け
り

中国
二句

号令を待つ兵馬
脩山笑ふ

楊貴妃の目覚むる頃
や柳絮飛ぶ

未熟が好き
不器用が好き
麦こがし

あくびしてゐる
真夜中のサングラス

萩の風終の住処を思ひをり

かける電話かかる電話や十二月

運使ひ果たしし顔の寝酒かな

好きにだけ降らせて雪を搔きにけり



句集 風隠くや (かぜきくや) 春燈叢書第一九〇輯
二〇一九年九月十五日 初版発行
著者 三上 程子
発行人 山岡嘉美子
発行所 ふらんす堂
〒182-0002 東京都調布市仙川町一―五―三八―二F
電話 〇三 (三三三三六) 九〇六一 FAX 〇三 (三三三三六) 六九一九
ホームページ <http://kuransudo.com/> E-mail info@kuransudo.com
振替 〇〇七〇一―一八四二七三
装 幀 君嶋真理子
印刷所 日本ハイコム株
製本所 御松 岳 社
定 価 本体一七〇〇円＋税
ISBN 978-4-7814-1302-3 C0092 ¥2700E
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

著者略歴

三上 程子 (みかみ・ていこ) 本名・てひ子

昭和14年9月15日 大阪に生まれる

昭和48年 「春燈」入会

安住敦・成瀬櫻桃子・鈴木榮子・安立公彦に師事

昭和52年 俳人協会会員となる

平成元年 「春燈賞」受賞

句集 「積木の家」